

# セイント・ガウデンス 国定記念史跡

ニューハンプシャー州

史跡案内

アメリカ合衆国内務省  
ナショナル・パーク・サービス

## Saint-Gaudens in Cornish

コーニッシュを舞台としたセイント・ガウデンスの芸術と生活

オーガスタス・セイント・ガウデンスがはじめてコーニッシュに来たのは1885年、彼の友人であり弁護士でもあったチャールズ・C・ビーマンの所有する古い旅館を、経費のために借りた夏のことです。使い勝手のいいように、まず母屋に手を入れ、干し草小屋をアトリエに改装しました。この家にひとかたならぬ愛着を持ったセイント・ガウデンスは、1892年、とうとうここを買い取り、1900年まで毎年家族で避暑に訪れています。それ以降は、夏のみでなく、本邸として一年中ここで暮らすようになりました。フランス人の父の出生地にちなんで、この土地をアスベットと名付け、造園をはじめ、プールや野外ボーリング場、9ホールのゴルフコースなどを含めたレクリエーションエリアを、何年もかけて敷地内に完成させました。1900年頃に建てられた家は完全に改築され、優雅な曲線を描く階段や読書室が主廊下の脇に加えられたほか、寝室、サンルーム、ドーマー、そして石柱のたたずむゆったりとしたポーチなどが新たに追加されています。

人気が高まり、作品料が次々としてくるようになると、セイント・ガウデンスはアシスタントが働けるように大規模なアトリエを建てました。ここにきて彼の役割は製作監督へと変化します。つまり、作品のコンセプトを練り、彫刻の第一段階を仕上げ、そのあとはアシスタントが完成するまで監督するというものです。1904年、このアトリエは火事に遭い、彼の書籍やスケッチブック、製作中の作品多数を焼失しました。新アトリエ「キャリアティズ・スタジオ」がすぐに建設されましたが、これも1944年に焼失されています。



セイント・ガウデンス by ケニオン・コックス 1900年

ここコーニッシュには、多くの高名な芸術家たちがセイント・ガウデンスを慕って集まり、コーニッシュ・コロニーと呼ばれるサロンを作り上げました。画家ではマックスフィールド・パリッシュ、トーマス・デュイング、ジョージ・デ・フォレスト・ブラッシュ、ルジャ・フラー、ケニオン・コックス、演劇家パーシー・マックケイ、小説家ウィンストン・チャーチル、建築家チャールズ・プラット、彫刻家ポール・マンシップ、ヘルバート・アダムズ、ルイ・セイント・ガウデンス(オーガスタスの弟)といった、壮々たるメンバーです。彼等は、オーガスタス・セイント・ガウデンスを中心に、この地でダイナミックな芸術交流を展開しました。

1905年、コロニーのメンバーは、セイント・ガウデンスのコーニッシュ生活20周年を祝い、仮面劇「神々と黄金の杯」を同地で製作・上演しました。ギリシャの神殿を模した舞台装置はのちに大理石で再建され、現在はセイント・ガウデンス一家の墓所となっています。

1907年にセイント・ガウデンスが没してからは、芸術家たちは一人、また一人と、このコロニーを去っていきました。しかしながら、アメリカ彫刻界を代表する作家のコロニーと作品を、アスベットは今もなお、いきいきと伝えているのです。

## Sculptor of the American Renaissance

### アメリカ・ルネッサンスの彫刻家

オーガスタス・セント・ガウデンズは、1848年3月1日、アイルランドのダブリン市に生まれました。父はフランス人の靴職人で、母はアイルランド人です。生後半年たった頃、一家はアメリカに移住し、オーガスタスはニューヨークで少年時代を過ごしました。将来は芸術をやりたいという情熱を早くから持っていたため、13歳で学校を了えてすぐ、カメオ職人のもとへ弟子入りします。昼間はカメオの旋盤を操り、そのかたからニューヨークのクーパー・ユニオンやナショナル・アカデミー・オブ・デザインで授業を受けました。

こうして、見習い期間を了えた19歳の時には、彫刻家としての道を進むべく彼の心は決まっており、有名なエコール・ド・ボー・アートに入学するためパリに出発します。さらに、1870年にはパリからローマに移り、ローマに5年間滞在して古典芸術と建築を学びました。当時ローマで同じく芸術を学んでいたアメリカ人オーガスタ・ホーマーとの出会いもこの頃です。オーガスタは、後にセント・ガウデンズの妻となった女性です。コミッションを受け取っての作品製作も、このローマではじめて経験しました。その後、1876年には、南北戦争の海軍提督デビッド・グラスゴー・フラガット像製作を受注、このように大規模な作品は、セント・ガウデンズにとってとはじめてのことです。1881年にニューヨークで除幕されたこの作品は、写実主義と象徴性を微妙に融合させたもので、アメリカの彫刻芸術に新しい息吹きをもたらしたとして、絶賛を浴びました。こうしてセント・ガウデンズの名前は世に聞こえるようになり、作品も次々と依頼されるようになったのです。

一方、1888年から97年にかけて、セント・ガウデンズは若手指導も続けました。芸術を教えることは彼にとって情熱のひとつであり、高まる名声のおかげでその実現が可能になったのです。若いアーティストたちを自宅で指導したほか、アート・スチューデント・リーグでも教え、生徒の中から多くのアシスタントを採用しました。彼はまた、1893年世界コロンビア博の芸術顧問を勤め、ローマのアメリカン・アカデミー支援に尽力し、国会議事堂の建築美保存と改善に参加したマクミラン・コミッションの一員としても活躍しました。

セント・ガウデンズの名声を不朽のものにしたのは、ニューヨークのセントラルパークにあるシャーマン将軍像や、シカゴの「佇むリンカーン」像といった公共記念碑でしょう。後者は特に、同大統領を称えた像の中でも最高傑作のひとつとされています。セント・ガウデンズによる作品は、写実主義と理想主義の両方を取り込んで、これまでのアメリカ彫刻には見られなかったダイナミックな雰囲気を出しています。ウィリアム・T・シャーマン将軍の記念碑は、特にこの技法を用いたもので、空のある勝利の女神に導かれ海に向かって行進する将軍の、決然たる姿をデザインしたものです。ほかにもアダムズ、ピーター・クーパー、ジョン・A・ローガン将軍など、多くの公共記念碑を手がけていますが、どの作品も時を経てなお色褪せないセント・ガウデンズの独創性を体現しています。この時期の作品の中で最高傑作とすれば、おそらくショー大佐記念碑をおいてほかにはないでしょう。これは、完成に14年の歳月を費やして、1897年、ボストンで発表された作品ですが、セント・ガウデンズによる「ブロンズの交響曲」と呼ばれています。

セント・ガウデンズはまた、建築界の寵児スタンフォード・ホワイトらと共に、彫刻記念碑と建物や庭園との融合に取り組みました。こうして、創造性にあふれたユニークな環境で作品の展示が行われるようになりました。

1900年、癌と告知されたセント・ガウデンズは、本部をコーニッシュに移すことに決めました。1907年8月3日に亡くなるまでの7年間は、病と闘いながらも精力的に製作を続け、多数のレリーフや記念碑を世に送り出しました。彼の没後も、妻オーガスタと息子ホーマーは毎年避暑にこの地を訪れています。1919年、このコーニッシュを史跡保存すべく、遺族によってセント・ガウデンズ記念協会が設立されました。そして1965年には、同協会の寄付で、この史跡がナショナル・パーク・サービスの管理に委ねられたのです。

## Cameos, Medals, and Coins

### カメオ、メダル、コイン

セイント・ガウデンズは、カメオというミニチュア・レリーフ彫刻で、芸術家としての第一歩を歩きました。カメオ職人のもとで6年間見習いを続け、貝や石を素材に、繊細で美しい作品を数多く遺しています。晩年には、メダルやコインなどのレリーフも手がけました。作品の例としては、ジョージ・ワシントンの大統領就任100周年記念(1889年)、シカゴ開催の世界コロンビア博記念(1893年)、セオドア・ルーズベルト大統領就任記念(1905年)などがあげられます。1904年には、米國造幣局のために1セント硬貨、10ドル及び20ドル金貨をデザインしました。これはルーズベルト大統領の依頼によるもので、古代ギリシャやローマの芸術に伝わる高浮き彫りの美しさを再現したいというのが、大統領とセイント・ガウデンズの目標でした。この制作によって、彼は米国のコインをデザインした最初の彫刻家になりました。高浮き彫りコイン製造の困難を克服して、ようやく金貨が発行されたのは、1907年、セイント・ガウデンズの死後数年たったからのことです。この金貨はその後、1933年まで発行されていました。「ダブル・イーグル」と呼ばれた20ドル金貨の裏面には、自由の女神が彫ってありますが、これは今日でも米國純金貨のデザインに使われています。芸術家や収集家など、多くの人々にとって、セイント・ガウデンズのデザインは今も変わらず、アメリカのコイン中最も美しいものとされているのです。



1907年発行 20ドル金貨

## Portrait Reliefs

### 肖像レリーフ

セイント・ガウデンズの業績の中でも最たるものは、肖像レリーフであろうと言われています。彼が好んだ「薄浮き彫り」という手法は、彫刻としては最も手間がかかって難しいとされ、「粘土板を使ったスケッチ画」のようなものとよく評されました。こうしたレリーフでは、実物の形そのものよりも見かけを対象としており、光の陰影がもたらす微妙な精細によって、細部や遠近感を表現しています。

セイント・ガウデンズはブロンズや木、大理石、石膏など、様々な素材を用いて、これまでの肖像レリーフにはあまり見られなかった、いきいきとした表情や動きを伝えることに成功しました。構成の美しさだけでなく、繊やかな表情の描写、そして、モデルの人となりへの深い洞察が、作品のひとつひとつににじみでています。壁画家ケニオン・コックスにして、「15世紀以降最も完璧なレリーフ彫刻家」と言わしめた、それがセイント・ガウデンズの肖像レリーフなのです。

コーニリウス・ヴァンダービルトやサミュエル・グレイ・ウォードなど、各界の名士がこぞってセイント・ガウデンズに肖像レリーフを依頼しました。結果、妻オーガスタや隣人の子供もウィリアム・ピーマン、スコットランド人作家ロバート・ルイス・スティーブンソンらをモデルとした薄浮き彫りにはじまって、高浮き彫りのルイズ・ハウランド像まで、100点以上の肖像レリーフが製作され、今に伝えられています。



ウィリアム・E・ピーマン 1886年

# Touring Saint-Gaudens

## セイント・ガウデンス史跡ガイド

アメリカ彫刻界の巨匠セイント・ガウデンスの邸宅、庭園、そしてアトリエへようこそ。ここは、セイント・ガウデンスが、1885年から13年間避暑用の別荘として使用し、1900年以降彼の死までの7年間を、本邸として過ごした場所です。以下にあげた見所解説の各番号は、英語版のマップにある番号と対応しています。両方併せてご利用下さい。

### 1 リトル・スタジオ

建築家ジョージ・フレッチャー・パーブの設計で、1904年に建設されました。もとの干し草小屋をセイント・ガウデンスがアトリエに改装して使っていましたが、これはそのあとに建て直したものです。建て直す前のアトリエからは、「存心リンカーン」像など多くの作品が誕生しました。(同作品のスケッチは、彼のアシスタントが近くのもっと大きなアトリエで拡大模写し、完成させました。この大アトリエも1904年に焼失しています。)ドリアン様式の柱と欄干は、1889年のイタリア旅行後に、セイント・ガウデンス自身がデザインしたものです。壁のシックいレンガ色で、バルテノン式フリーズ(帯状彫刻装飾)を加えることにより、波が気に入っていた地中海風になじげられました。現在この建築では、セイント・ガウデンスの作品が展示され、もと石炭坑型窯は記念品ショップに使われています。

### 2 アスペット

1800年頃に旅館として建てられたこの建物は、レンガ造りのフェデラル・スタイルで、地元の人々には「ハギンズ・フォリー(ハギンズ氏の建築遺産)」と呼ばれていました。セイント・ガウデンスはこれを、フランス人である父の出生地にちなんで「アスペット」と名付けています。1885年以降はドーマーの池、イオニア様式の柱を備えたポーチが西側に増築されました。邸宅内には、セイント・ガウデンス一家が使用していた家具調度や、旅行から持ち帰った装飾品などが、当時のままに展示されています。建物の前にそびえるサイカチの木は、1886年に植樹されました。



アスクトニー山南麓にいたアスペットと庭園

### 3 フラワー・ガーデン

松とアメリカ栂の生け垣に周囲を縁どられ、多年生の草花が咲き誇るこの庭園は、イタリア式純血園のスタイルを模したものです。アスペット周辺の造園に関しては、設計段階からセイント・ガウデンス自身が積極的に参加しました。

### 4 アダムズ・メモリアル(1891年/1974年)

歴史家ヘンリー・アダムズが妻クローバーのために依頼した、ブロンズ製の墓碑を再現したもので、オリジナルはワシントンD.C.のロッククリーク霊園にあります。アダムズはこれを「神の平和」と名付け、セイント・ガウデンス自身は「苦痛も喜びもはやくはかない彼岸の神祕」と呼んでいました。

### 5 ボーリング・グリーン

セイント・ガウデンスの野外ボーリング場。

### 6 ショー大佐記念碑(1897年/1901年)

南北戦争で活躍したマサチューセッツ第54黒人志願兵部隊を称えたもので、セイント・ガウデンスはこのデザインを最終案に採用しました。14年の歳月をかけて完成したオリジナルはボストンにありますが、それとは少し異なったユニークな複製をここに展示してあります。

### 7 露兼アイスハウス

建設は1885年以前で、1891年に改築。冬季に近くのプロウミーダウン池から運んで来た水を貯蔵するのに使われました。そりなど、馬にひかせた乗り物が展示されています。

### 8 切り花ガーデン

もとは菜園でしたが、現在は一年草を植えて生け花に利用しています。また、昔ながらの草花の品種を今に伝える役割も果たしています。

### 9 フアラガット提督記念碑(1881年)

南北戦争の英雄デイビッド・グラスゴー・フアラガット提督を称えたこの記念碑は、セイント・ガウデンスが最初に手がけた公共記念碑です。建築家スタンフォード・ホワイトが台座のデザインを担当しました。ホワイトとセイント・ガウデンスによるこのような協力は、多くの作品に反映されていますが、これはその中でも最初のもので、この作品で大成功を収めたことにより、セイント・ガウデンスは彫刻界の第一人者と認められました。

#### 10 ピクチャー・ギャラリー

この館は1948年、セイント・ガウデンス記念協会の後援でギャラリーに生まれ変わり、以来作品の展示を入れ替わり行っています。

#### 11 ニュー・ギャラリー

キャリアティズ・スタジオの火事から4年経った1948年、セイント・ガウデンス記念協会の尽力で、延焼を免れた家屋二つが改築され、展示ギャラリーとなりました。ローマ建築風中庭とプールは、建築家ジョン・エイムズによるデザインです。このギャラリーには、肖像レリーフをはじめ、1907年発行の金貨やメダル、カメオなど、セイント・ガウデンスの作品のデザインが展示されています。

#### 12 ラビン・スタジオ

建設は1900年頃とされ、セイント・ガウデンスのアシスタントが大理石を彫るのにこのアトリエを使いました。ここはまた、1904年の火事のあと、彫刻製作にも使われています。1969年に復旧が行われ、現在は住み込みの彫刻家のアトリエとなっています。

#### 13 ラビン・トレイル

自然の中を散策する、0.4kmほどのトレイル。ラビン・スタジオから始まって、プロウミーアップ・ブルック沿いに古い馬車道を神殿まで歩くコースです。セイント・ガウデンスが作った水浴場がトレイルの終わりにあります。

#### 14 神殿

セイント・ガウデンスのコーニッシュ生活20周年を記念して、コロニーの芸術家たちが1905年に劇を創作しました。その舞台がもともとのデザインで、のちに大理石で作り直され、今はセイント・ガウデンス家の墓所となっています。

#### 15 プロウミーダウン・トレイル

眺望豊かな3.2kmのハイキングトレイル。プロウミーダウン・ナチュラルエリアを通過してミル池へと下って行きます。80エーカーにわたって広がる森は、ホホワイトバインの原生林です。

## About your visit

### ご案内

セイント・ガウデンス国立記念史跡は、ニューハンプシャー州コーニッシュの、12A号線を少しはずれた所にあります。ウェストレバノンの南端からは12マイル(約19km)、クリアモント北端からも12マイル、ヴァーモント州ウィンザーからは2マイル(約3km)の距離です。ウィンザーからお越しの場合は、屋根付き橋を渡って12A号線を左に向かって下さい。ウェストレバノンからは、I-89号線のexit 20で降り、12A号線を南に向かいます。アスカトニーからはI-91号線をexit 8で降りて、12A号線にアクセスするまで走り、12A号線を北上して下さい。

園内には、公共電話、レストラン施設、キャンプ場などの設備はありません。お手洗いは駐車場にあり、車椅子の方もご利用になれます。

開園時間及び入場料: 5月下旬から10月下旬まで、毎日開園。建物の開館時間は午前9時から午後4時30分までですが、園内は場のある間開放しています。16歳未満は入場料無料。ゴールデンエイジ、ゴールデンアクセス、ゴールデンイーグルの各バスポートをお持ちのビジターも無料になります。

安全のために: 駐車場を出て前の道を横断する時は、周囲をよく確かめましょう。大理石の階段は、濡れていると滑りやすく、また、レンガ敷の歩道は凹凸があるため足元の注意が必要です。森やトレイルでは、蜂やツタウルシなどにも気をつけて下さい。

車椅子でのアクセス: 建物の中には、車椅子でアクセスできない場所もあります(イラスト地図2, 3, 12, 13, 14, 15番)。オーディオテープや盲人用案内、字幕ビデオ、インタラクティブ・レーザーディスクなどが、リトル・スタジオ(イラスト地図1番)に設置してありますのでご利用下さい。



管理と所在地:

セイント・ガウデンス国立記念史跡は、米国内務省ナショナル・パーク・サービスが管理しています。  
お問い合わせやコメントは、下記の住所までお寄せ下さい。

Saint-Gaudens National Historic Site  
Superintendent  
139 Saint-Gaudens Road  
Cornish, NH 03745-9704  
電話 (603) 675-2175  
<http://www.nps.gov/saga>